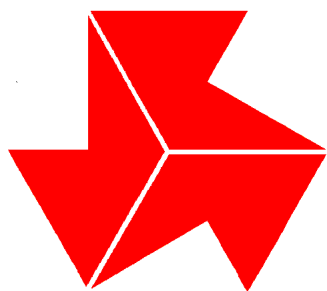


平成23年度
第5回石川県高等学校体育連盟研究大会

研 究 紀 要



主催 石 川 県 高 等 学 校 体 育 連 盟

あいさつ

石川県高等学校体育連盟

副会長 中島 敏一

石川県高等学校体育連盟研究紀要第4号の発刊にあたり、ご尽力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

さて、今年度の全国研究大会は鹿児島県で開催され、平成21年度より行われた課題研究、各分科会での優秀な研究発表に対する表彰が継続され、今回からは優秀な研究発表の中からさらに最優秀を選び賞金（報奨金）が授与されました。このことは、研究発表者にとって益々励みになるとともに、今後各都道府県高体連の研究活動の益々の活性化につながると思われます。また、星稜高等学校トランポリン部の西川明大先生が分科会で発表され、残念ながら表彰は受けることができませんでしたが、他の発表に勝るとも劣らない内容の発表でした。発表・発表までの準備等、本当にお疲れ様でした。

県内では、平成23年11月に第5回石川県高等学校体育連盟研究大会を青少年研修センターで開催しました。各専門部、各高等学校のご協力により、約100名の参加をいただき、全国発表のリハーサルを兼ねたトランポリンと、バレーボール、ソフトテニス、卓球の4専門部から発表が行われました。それぞれ内容の濃い発表で、他の専門部でも生かしていただければ幸いに思います。発表された専門部・先生方ありがとうございました。

最後に、県高体連による研究活動がより発展し、指導力や競技力が向上し、24総体をはじめとする全国大会等で、石川の高校生が躍動し活躍されることを願っております。石川県高等学校体育連盟研究大会が今後益々活性化するよう、関係各位にさらなるお願いをし、あいさつにかえさせていただきます。

平成23年度 第5回石川県高等学校体育連盟研究大会開催要項

- 1 目 的 石川県高等学校体育連盟に加盟する各高等学校の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主 催 石川県高等学校体育連盟
- 3 日 時 平成23年11月30日（水） 14：00～16：00
- 4 会 場 石川県青少年総合研修センター
金沢市常盤町212-1 TEL 076-252-0666
- 5 参加対象 石川県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
- 6 研究主題 「チェスト！ 夢はここから 燃えよ高校生」
～スポーツで切り拓く未来～
- 7 内 容 研究発表

「ジュニア選手の育成と地域、全国普及を通して部活動を活性化する」

発表者 トランポリン専門部
星稜高等学校 西川 明大 教諭

「ジュニア育成をめざすバレーボール一貫指導」

～中・高連携による成果と課題～
発表者 バレーボール専門部
小松高等学校 北橋 浩志 教諭

「選抜チームの国体への取り組み」

発表者 ソフトテニス専門部
鹿西高等学校 高 行彦 教諭

「日本一を目指して」

～継続練習と新たな挑戦～
発表者 卓球専門部
遊学館高等学校 植木 大 教諭

8 日 程

13:30	14:00~	14:10~	15:40~	15:55~
受付	開 会 式	研 究 疑 問 発 表 答 答	指 導 助 言	閉 会 式

1. はじめに

トランポリン競技（以下「本競技」と略す）は、人間の『空を飛びたい』という夢を叶えてくれる素晴らしい競技です。高いところに飛び上がる＝危険では？との見方もありますが、順を追って指導を受ければ、誰でも楽しく空中に飛び出すことが可能です。

オリンピック種目として、2000年シドニー大会から、正式種目となり、マイナー競技であった本競技の日本国内での認知度、普及度も徐々に増してきました。来年開催のロンドンオリンピックでは、文部科学省が行っている、『チーム「ニッポン」マルチサポート事業』のターゲット競技に指定され、メダル獲得が期待されています。

全国的にはまだまだ未普及県も残っており、オリンピックでのメダル獲得が未普及地域への普及に勢いがつくのではないかと関係者一同期待しております。また、本研究発表も関係の皆様方に競技を知って頂くことにより、停滞している普及状況を活性化させる大変良い機会であると感じております。

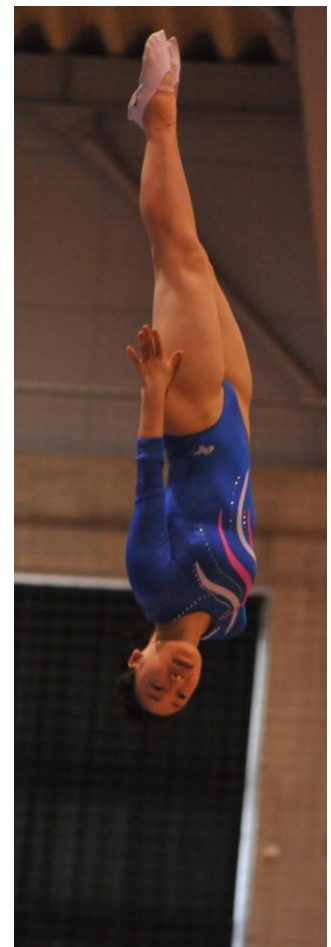
本研究では、トランポリン競技の普及と、本校トランポリン部が現在までに行ってきた活動と地域との連携やジュニア育成を通しての活動内容を鑑み、今後の活性化につながることを目的として実施しました。

2. トランポリン競技とは？

トランポリンの起源は、古くは中世のヨーロッパにおける、ある民族による『ケット上げ』と言われていました。ケット上げは、大勢でひとつの大きな布を手にし、その上に乗せた人形を上空高く放り上げるセレモニーです。韓国では、ノルティギと呼ばれるシーソーのような遊技が古くからお正月の遊びとして行われてきました。さらには、サーカスの空中ブランコの安全ネットを利用して、再び、ブランコに乗り移る芸等、現在のトランポリン器具に至るまでに、高度な曲芸、跳躍が行われていました。現在のそのようなスポーツ的な、体育的な跳躍台を発明したのは、1930年代、アメリカのジョージ・ニッセン氏です。彼は、その商品を Trampoline（トランポリン）と名付け販売しました。トランポリンは、第二次世界大戦中にパイロットが飛行を開始する前の訓練プログラムの一部として使用され、広くアメリカ全土へと普及していきました。1950年代、彼はヨーロッパ大陸や日本へトランポリン普及ツアーを行い、その時に初めて日本へと紹介されました。

日本での競技会は、昭和38年、体操競技の特殊種目として開催されたのが最初であり、その後、昭和49年日本トランポリン協会が発足し、現在に至っています。

現在、使用されている競技用トランポリンは、横幅約4メートル、縦幅約2メートルの長方形の跳躍台で、ベッドと呼ばれる編み込まれたネットを、110本を超える金属製のスプリングで引っ張り、上空へ飛び出すことを可能にしたスポーツです。



3. 競技方法

競技は10種目の異なる技を連続で行い、演技の綺麗さを評価する『演技点』と、演技の難しさを評価する『難度点』及び、2011年1月より採用された、『高さ得点』の合計得点で競います。

演技点は、技の姿勢や跳躍の高さの維持などを採点対象に、5人の審判員による10点満点からの減点法で採点されます。5人の審判員の最高点と最低点をカットした、中間点の合計で決定します。(例： $9.0 \cdot 9.1 \cdot 9.2 \cdot 9.3 \cdot 9.4 = 27.6$)

難度点は、それぞれの種目において、1/4の宙返りを行うと0.1点、1/2の捻りを行うと0.1点というように、機械的に算出されます。

高さ得点は、トランポリンから離床し、着床するまでの空中に浮き上がっている時間のみを専用の測定器具を用いて測定します。タイムは1秒1点となり、1000分の1秒まで測定されます。

予選は、規定演技（第一自由演技）と自由演技（第二自由演技）の合計得点で競い、上位8名～10名が決勝に進出し、決勝で、再度、自由演技（第二自由演技）を行い勝敗が決定します。

競技は、個人競技、シンクロナイズド競技、団体競技の三種目で行われます。シンクロナイズド競技は、2人の選手が横並びのトランポリンで同時に演技を行い、演技点と難度点に加え、どれだけ同時に演技ができたかを評価する同時性得点を加え採点します。

団体競技は個人競技の3名の選手（1チーム最大4名）の得点を合計して競います。

4. 国内でのトランポリン競技

昭和49年に、日本トランポリン協会が設立され、昨年、第48回の全日本選手権が開催されました。40都道府県にトランポリン協会が設立され、競技及びトランポリンを用いたレクリエーション活動が行われています。表1は（社）日本トランポリン協会に登録し、全国レベル大会に出場している各県の団体数を表しています。地域によって普及の格差が大きく、特に、中国、四国地方には全国レベル選手の育成はおろか、トランポリンが存在していない、全く普及していない地域が存在しているのが現状です。平成10年には、国際トランポリン連盟の世界体操連盟への統合を受けて、（社）日本トランポリン協会も（財）日本体操協会に加盟し、日本体育協会の傘下団体として活動しています。

主な全国大会として全日本選手権を始めとし、全日本ジュニア競技選手権大会、全国高等学校競技選手権大会、全日本学生選手権大会等が行われています。国際的には、（財）日本体操協会傘下のもとに、オリンピック大会、世界選手権大会、ワールドカップ大会アジア大会等に代表選手を派遣しています。

表1 全国大会出場クラブ数

北海道	21	石川県	28
秋田県	1	愛知県	10
宮城県	6	静岡県	26
山形県	10	奈良県	1
青森県	3	岡山県	4
福島県	9	京都府	4
栃木県	1	兵庫県	8
千葉県	3	大阪府	29
群馬県	5	滋賀県	1
茨城県	11	島根県	2
神奈川県	13	広島県	3
埼玉県	14	大分県	1
東京都	35	鹿児島県	5
長野県	2	熊本県	14
富山県	2	沖縄県	3
福井県	2		

5. 県内でのトランポリン競技

石川県のほとんどの市町村にトランポリン協会が設立され、競技用トランポリンやレクリエーション用トランポリンが体育館等に設置されています。金沢市内では、ほぼ全ての児童館にレクリエーション用トラン

ポリンが設置されており、子供達の活動と体験の場となっています。

23年度の選手数は、85クラブ494名が登録し、トランポリン教室の児童や、生涯スポーツとしての活動を合わせると、多数の愛好者がいると考えられます。

小・中学生の強化体制としては、レクレーション用トランポリンを使用したミドルABクラス、競技用トランポリンを使用したハイクラスに分けられ、定期的に強化練習会を開催し、継続した強化体制が築かれています。強化体制の成果やトランポリン競技人口等から、ジュニア層では国内トップレベルの選手が育っています。

高校での活動としては、昭和57年に高体連に加盟、高校総体、新人大会が行われ、全国高等学校トランポリン競技選手権大会の予選会と位置付けられています。平成20年度からは、トランポリン専門部が主催し、高校生合同練習会を開催し、off期間中のモチベーションの維持と体作り、各校の練習内容の確認など、専門部としての活動も活性化してきました。

県内には内灘高校、金沢学院東高校、星稜高校、北陸大谷高校、北陸学院高校にトランポリン部が創部され、県外からも多くの選手が入学しています。

6. 星稜高校トランポリン部の活動について

表2 部員数の移り代わり

平成14年度に、私が星稜高校（以下「本校」と略す）に赴任した際に同好会として活動を開始しました。平成15年には部活動に昇格し、正式に活動を開始しました。活動当初は数名のトランポリン部員、体育館1/4面でのスタートでしたが、年々練習環境も整い、現在では週6回の練習環境が確保できるようになりました。

活動当初は入部希望者がいない年もあり、初心者部員確保と経験選手の強化を同時進行していました。今後、安定した選手の確保と将来的には国際舞台で活躍できる選手を育てたいと思い、幼少期からの選手育成、強化を考え、平成17年に星稜ジュニアトランポリンクラブを設立しました。現在までに5名が本校中学、高校で競技活動を行っております。

競技結果としては、全国高校選手権では、男子団体3度の優勝、女子団体4度優勝し、その結果から、平成21年度以降は県外からの入学希望者が増え、平成21年度には2名、22年度2名、23年度4名の合計8名の県外選手が在籍し、星稜ジュニア出身の選手を含め、毎年、競技力の高い選手が入学するようになりました。

年度 (西暦)	部員数 ()内は新入部員 ★は星稜ジュニアクラブ出身選手数
平成14年度 (2002)	同好会として活動 高校女子1名 中学女子1名
平成15年度 (2003)	高校女子4名 (3) 高校男子1名 (1) 中学女子1名
平成16年度 (2004)	高校女子6名 (3) 高校男子1名 中学女子1名
平成17年度 (2005)	高校女子7名 (1) 高校男子3名 (2)
平成18年度 (2006)	高校女子4名 (0) 高校男子3名 (0) 中学女子3名 (3) ★3
平成19年度 (2007)	高校女子4名 (3) 高校男子5名 (3) 中学女子3名 ★4
平成20年度 (2008)	高校女子4名 (1) 高校男子4名 (1) 中学女子3名 ★4
平成21年度 (2009)	高校女子6名 (2) 高校男子6名 (2) 中学女子1名 (1) 中学男子1名 (1) ★1
平成22年度 (2010)	高校女子6名 (3) 高校男子5名 (2) 中学女子1名 中学男子1名 ★1
平成23年度 (2011)	高校女子9名 (4) 高校男子6名 (2) 中学女子1名 中学男子1名 ★1

7. 星稜ジュニアトランポリンクラブの設立

(1) 設立の目的

本校トランポリン部に入部する選手の育成が活動存続のために必要であると感じたこと、又、ジュニア期からの一貫指導が高い競技力を生み、国際舞台で活躍できる選手の育成方法であると思い、星稜ジュニアトランポリンクラブ（以下「星稜ジュニア」と略す）を設立しました。

平成17年の活動開始から、地域の子ども達を対象としたトランポリン教室を開催し、本競技の楽しさや、本競技を通して他の競技につながるような空中感覚づくりを主として実施してきました。18年度からは指導者の充実と共に、本格的に本競技を行いたい子ども達を対象にした制度を作り、他団体との吸収、合併もあり、組織的な育成・強化活動が可能な団体となりました。

(2) 星稜ジュニアトランポリンクラブ活動内容

活 動 日	月、火、水、金、土（週5回）		
会 費	トランポリン教室	週1回（火）or（水）	2000円
	選手育成コース	週2回（火）（土）or（水）（金）	4000円
	選手コース	週5回（月）（火）（水）（金）（土）	7000円
指 導 者	男性3名 女性4名 （社）日本トランポリン協会公認普及指導員及びコーチ		
運 営	保護者会を設立し、代表、会計を選出し運営		
在 籍 数	幼児（男子3名、女子5名） 低学年（男子2名、女子9名） 高学年（男子2名、女子8名） 中学生（女子2名） 高校生（女子2名） 合計33名		

(3) 本校部活動の活性化として

本校生徒は、指導資格の問題で宙返り等の指導はできませんが、早めに練習に来た幼児、児童と触れ合いウォーミングアップや補強運動を共有することで、本校生徒、幼児、児童との指導を通じた学びの場となっています。また、試合にも一緒に参加することで、お互いを高めあい、支えあい、相互協力することは、一つの区分だけではできない教育であると感じ、心の活性化に繋がっているように思います。

(4) 今後の展望

星稜ジュニア設立後、5名の選手が本校中学、高校へ入学し活動しました。今後も星稜ジュニアで育成された選手が本校へと入学してくると思っています。幼少期からの一貫指導体制であることから、本校中学、高校へと進学する上で指導者、環境の変化がなく練習することがき、保護者においても指導方針も理解しており、様々な面で進学に伴う段差を生めることができるのではないかと考えております。

8. 星稜子どもトランポリン体験活動実行委員会の設立

平成17年4月「星稜スポーツアカデミア」がスポーツ技術向上を主とした教室を設立したのをきっかけに「星稜子どもトランポリン体験」実行委員会を設立。子供を対象とした活動を企画実施し、子どもの人間形成ならびに地域住民との交流を促進したいと考えました。活動当初はトランポリン競技の普及と体験を主としていましたが、平成20年度、21年度は、トランポリンを通して子供達と高校生の交流を深め、心を育てること、地域との連携、運動の一要素作りとしての効果を目標として開催しています。

(1) 主な活動内容

- 平成 17 年度 地域の小学校、幼稚園に広告を配布し、トランポリン教室を実施 (17 年度数回実施)
- 平成 18 年度 子供ゆめ基金に申請し、助成金を受けて開催 星稜子どもトランポリン体験活動
平成 18 年 11 月 1 日 (水) ~ 11 月 22 日 (水) 全 4 回
- 平成 20 年度 子供ゆめ基金に申請し、助成金を受けて開催 星稜子どもトランポリン体験交流活動
平成 20 年 11 月 5 日 (水) ~ 11 月 26 日 (水) 全 4 回
- 平成 21 年度 子供ゆめ基金に申請し、助成金を受けて開催 星稜子どもトランポリン体験交流活動
平成 21 年 10 月 30 日 (金) ~ 11 月 20 日 (金) 全 4 回

(2) 平成 20 年度、21 年度 星稜子どもトランポリン体験交流活動概要

活動の趣旨	子ども達の豊かな心と健やかな身体を育成するため、地域のスポーツ団体と学校が連携して子ども達にスポーツの体験を通して、心と体の双方向の健康が時代の子どもの豊かな感性と創造性を育み、心豊かな教育の再興に資するものとする。地域の大人と高校生や異なる年齢の子供たちの体験交流が社会性の涵養を図り、心身の調和のとれた発育を育むことを目的とし、開催した。		
活動の特色	トランポリンのような特殊な体験活動に触れる機会は日常生活の中ではほとんどなく、トランポリン器具設置してある場所は少ない。鳥のように空中を舞い高く飛び上がる行為はとても楽しく他の体験活動では味わうことができない。ジャンプをすると自然と笑顔になり、楽しく愉快的な気持ちとなり、大人と子どもでしかできないトランポリンを用いたレクリエーションや楽しいスキル練習を通して指導に入る高校生、大学生と良い雰囲気の中で自然に交流を深めることができると考える。		
活動期間	平成 20 年 11 月 5 日 (水) ~ 平成 21 年 11 月 26 日 (水) までの毎週水曜日 全 4 回 平成 21 年 10 月 30 日 (金) ~ 平成 21 年 11 月 20 日 (金) までの毎週金曜日 全 4 回		
活動場所	星稜高等学校体育館		
運営	星稜子どもトランポリン体験活動実行委員会 (6名)		
指導者	平成 20 年度 大学生 3 名、高校生 12 名 平成 21 年度 大学生 3 名、高校生 15 名		
募集地区	石川県金沢市を中心に近隣地域		
募集方法	石川県全県新聞に掲載 幼稚園、小学校に募集広告を配布		
参加費	500 円 (保険料のみ)		
参加者数	平成 20 年 全 4 回 延べ人数 80 名 平成 21 年 全 4 回 延べ人数 110 名		

平成二十年十月 北國新聞に掲載

<p>活動 プログラム</p>	<p>園児、低学年、高学年全員でウォーミングアップ（リズム体操、ストレッチ） 模範演技（星稜高校トランポリン部員の演技を実施） グループ分け後 説明、講師、補助生徒紹介 体験開始</p> <p><園児></p> <p>第1回 テーマ「トランポリンに親しむ」 第2回 テーマ「ジャンプ・ストラドル・タックバウンス」 第3回 テーマ「リズムジャンプ・レクリエーション」 第4回 テーマ「ジャンプ・シートドロップ・スイブルヒップス」</p> <p><低学年></p> <p>第1回 テーマ「トランポリンに親しむ」 第2回 テーマ「ジャンプ・ストラドル・タックバウンス」 第3回 テーマ「リズムジャンプ・レクリエーション」 第4回 テーマ「ジャンプ・シートドロップ・スイブルヒップス」</p> <p><高学年></p> <p>第1回 テーマ「トランポリンに親しむ」 第2回 テーマ「ジャンプ・ストラドル・タックバウンス」 第3回 テーマ「リズムジャンプ・レクリエーション」 第4回 テーマ「ジャンプ・バックドロップ・連続種目」</p> <p>*マット運動 前転、後転、側転等 トランポリン3台の順番待ち時に行う。 *4日間で1クールの体験交流活動ではあるが1回きりの参加も可能。その都度、体験テーマを考慮する。</p>
---------------------	---

9. まとめ

星稜ジュニアの育成活動や星稜子どもトランポリン体験交流活動等を利用し、高校生と児童との交流や地域との連携、普及を進めてきました。結果としては、相互の協力から、心を育む活動に繋がり、活性化を果たし、地域に根付いたクラブに成長してきたと感じています。

今後としては、星稜ジュニアでは、幼児期からの育成、強化活動を継続して実施し、本校との連携を図りながら、将来的には国際的に活躍できる選手を育てたいと思います。また、星稜子どもトランポリン体験実行委員会も、ますますの活性化を目指し、地域に密接した体験活動を企画運営していきたいと考えております。

本競技全体で考えると、オリンピック競技に決定した後、普及度・認知度は大きく加速してきましたが、まだまだ本競技はマイナーな競技であり、選手、指導者は、勝っても評価されず悔しい思いをすることも多くあります。それは、高校年代では、全国高等学校体育連盟や日本体育協会主催競技での勝利が評価されるべき項目であることにに対し、本競技での勝利は、現在この位置にいないことが大きいと考えます。将来的には前述した団体に加盟し、メジャー競技として評価されることが、選手、指導者の大きな喜びとなり、様々な面で活性化に繋がるのではないかと考えますが容易な事ではありません。しかしながら、本競技の現状における長所だけで考えれば、中学、高校年代で勝つことよりも、将来の最終目標に向けての段階指導ができることも本競技ならではの特徴であり、この長所に全国各地域での普及が加わり、新しい形で発展、活性化していくことを願っております。

「ジュニア育成をめざすバレーボール一貫指導」

～中・高連携による成果と課題～

バレーボール専門部

小松高等学校 北橋浩志

1 一貫指導バレーボールジュニア育成事業とは

石川県バレーボール協会主催のもと、中体連と高体連のバレーボール専門部が連携して、次代の石川県バレーボール界発展を担うジュニア育成に焦点をあてるとともに、競技的要素が重視されてくる中学生を対象に「発掘・育成・強化」へと発想を転換した一貫指導プログラムをもとに実践するものである。

指導体制は、中・高体連の日本体育協会公認資格を有する指導者たちがスタッフを組み、一貫指導の理念について共通理解を図り、年間10回の活動計画および練習計画を立案して指導を担当している。

この事業は平成17年4月から始まり、今年で7年目を迎えている。

2 取り組みまでの経過

(1) 平成16年6月 競技別一貫指導プログラム（石川県体育協会平成17年3月発行）のバレーボール競技の頁作成に向けて、県バレー協会指導普及委員3名が担当した。

(2) 平成17年3月 石川県教育委員会から、平成17・18年度一貫指導プログラムに則したジュニア育成事業のモデル競技団体として、県バレー協会が指定を受ける。（年間予算100万円の2年継続事業）

一貫指導プログラムは、あくまで理想のあり方として作成した内容だけに、突然の指定と実際の事業運営ということで困惑したことも事実。県バレー協会の臨時理事会の結果、強化委員会事業の一環として進めることとなり、さらにPFUバレーボールチームを拠点とした年間20回の事業計画としてまとまった。また、指導普及委員会は指導者育成事業を強化して公認指導者を育成することにより、一貫指導の指導者充実に努めることとなった。

具体的な事業実施計画書の提出が指定直後の5月末にせまる中、実際に指導を担当することになる中・高体連の強化部担当者の話し合いが不可欠であった。しかも新学期の忙しい春先にもかかわらず、連日連夜におよぶ会議ともなれば疲労感も倍増だった。しかし、ジュニア選手の発掘と底辺拡大に向けた地道な事業に共通理解を図り、新しい光を追いつつも手探りの一貫指導が始まった。

(3) 平成19年3月 県バレー協会は、2年間の指定事業を終了したものの、平成19年度以降は協会独自の特色ある強化事業の一環として継続することを決定。

県バレー協会の年間予算50万円を受け、年間10回程度の継続事業として、中・高連携による一貫指導バレーボールジュニア育成事業は現在に至っている。

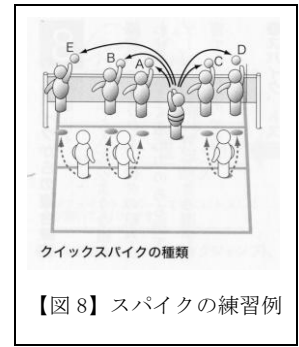
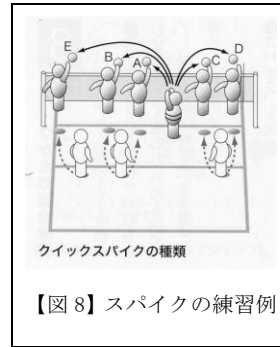
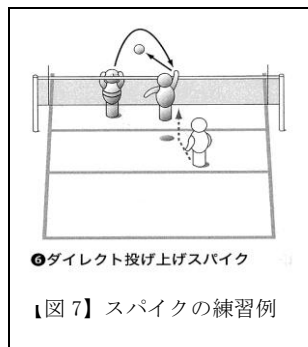
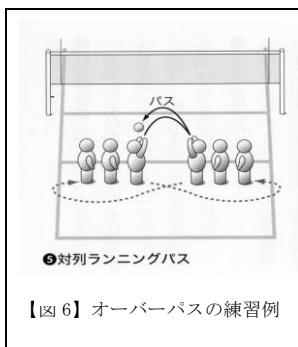
(4) 構成スタッフ一覧【平成22、23年度】

- ①事業委員長1名（県協会強化委員長）
- ②事業副委員長3名（県協会指導普及委員長、中体連専門委員長、高体連強化委員長）
- ③高校連絡担当1名（高体連強化副委員長）
- ④男子アドバイザーコーチ1名（元全日本選手）、女子アドバイザーコーチ1名（元全日本選手）
- ⑤指導担当男子責任者1名（県協会）、指導担当女子責任者1名（県協会）
- ⑥男子指導担当7名（高体連強化委員3名、中体連強化委員4名）
- ⑦女子指導担当7名（高体連強化委員3名、中体連強化委員4名）
- ⑧総務1名（中体連強化委員）


3 ジュニア期の指導プログラム（一貫指導プログラムから抜粋）

重点指導課程（ジュニア期）Ⅱ

ジュニア期（Ⅱ） 年齢／12歳～15歳	
指導方針	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎技術の完成を目指して、バレーボールの専門的トレーニングを開始する時期である。 ・個々の心身両面の成長段階に注意し、発育発達段階や経験年数の違いからトレーニング負荷のかけ方などに配慮する。 ・周囲から信頼される人間の育成を目指すために、礼儀作法や規律ある生活ができるよう指導する。
トレーニング	<ul style="list-style-type: none"> ・バレーボールに必要な身体能力を高めるためのトレーニングを行う。（特にコーディネーショントレーニング、スピードトレーニングを中心に） ・個々の身体能力や男女差を考慮して、トレーニングメニューを工夫する。
パス	オーバーパス <ul style="list-style-type: none"> ・直上パス（その場で行う、移動しながら行う、ターン（90°・180°・360°）しながら行う） ・対人パス（直上→正面、直上→バック、ダイレクトパス） ・ランニングパス（対列ランニング、ネットをはさんで対列ランニングパス）【図6】
	アンダーパス <ul style="list-style-type: none"> ・直上パス（移動しながら行う、ターン（90°・180°・360°）しながら行う） ・対人パス（直上→正面、直上→バック、ダイレクトパス） ・ランニングパス
レセプション	<ul style="list-style-type: none"> ・対人レセプション（ネットをはさまないで→ネットをはさみ距離を短くして、ネットをはさんで→距離を長く、セッターをつけて）
ディグ	<ul style="list-style-type: none"> ・両膝つきディグ（両膝を床につけた状態で、投げられたボールをレシーブする） ・対人ディグ（投げられたボールをレシーブ→打たれたボールをレシーブ） ・移動ディグ（フットワークを使い前後・左右に動いてレシーブする）
スパイク	<ul style="list-style-type: none"> ・3歩助走からスパイク（セッターがトスしたボールを軽打→強打） ・ダイレクトスパイク（反対コートから投げられたボールを打つ）【図7】 ・オープンスパイク ・クイックスパイク（A・B・C・Dクイック）【図8】
ブロック	<ul style="list-style-type: none"> ・ワンステップブロック（シャッフルステップ、クロスステップ、クロスオーバーステップ）【図10】 ・移動ブロック（センターからレフト・ライトへ、レフト・ライトからセンターへ移動してブロックする） ・移動ブロック2本連続
サーブ	<ul style="list-style-type: none"> ・コントロール打ちゲーム（エンドラインから打ち、入った場所により得点をつける）【図9】 ・前後打ち（エンドライン付近をねらう→アタックラインより前に落とす） ・弾道の低いサーブ練習（ネット上にひもを張り、ネットとひもの間を通すように打つ）




② シャッフルステップ



足をクロスさせず、送り足で目標点まで到達する。比較的短い距離の移動に使う。

④ クロスオーバーステップ（右図）



移動方向とは逆側の足（この例では右方向への移動なので左足）を、支店となる足の前を通過（クロス）させて移動する。

【図10】 ブロックの練習例

4 一貫指導ジュニア育成事業 活動実績（平成22年度）

回数	日時		男子		女子	
			場所	内容	場所	内容
1	6月27日(日)	9:00~17:00	県立工業高校	開講式 体力測定	県立工業高校	開講式 体力測定
2	7月25日(日)	9:00~17:00	兼六中学校	金沢商業と合同練習	鹿西高校	高校生と合同練習
3	8月7日(日)	9:00~17:00	遊学館高校	高校生と合同練習	高岡中学校	遊学館と合同練習
	8月10日(火)		長野県	U14 北信越大会参加	(女子活動なし)	
4	8月22日(日)	9:00~17:00	丸内中学校	小松工業と合同練習	星稜高校	高校生と合同練習
5	9月23日(祝)	9:00~17:00	県立工業高校	高校生と合同練習	金沢錦丘高校	高校生と合同練習
	9月25日(土)・26日(日)		(男子活動なし)		大阪府	全国ヤングバレー参加
6	10月23日(土)・24日(日)		(23日なし)	遊学館と合同練習	金沢伏見高校(23日)	高校生と合同練習
			西南部中学校(24日)		金沢商業高校(24日)	
	合宿		(合宿なし)		(宿舎:医王山スポーツセンター)	
7	11月23日(祝)	9:00~17:00	遊学館高校	高校生と合同練習	小松明峰高校	高校生と合同練習
8	12月18日(土)・19日(日)		大聖寺高校(18日)	高校生と合同練習	寺井高校(18日)	高校生と合同練習
			小松大谷高校(19日)		小松市立高校(19日)	
	合宿		(宿舎:小松大谷高校研修室)		(合宿なし)	
9	2月6日(日)	9:00~17:00	小松高校	高校生と合同練習	金沢西高校	高校生と合同練習
10	2月20日(日)	9:00~17:00	金沢商業高校	高校生と合同練習	PFU 体育館	県立工業と合同練習
11	3月5日(土)	9:00~17:00	(男子活動なし)		金沢伏見高校	高校生と合同練習
	3月6日(日)	9:00~17:00	県立工業高校	高校生と合同練習	金沢市総合体育館	金沢市バレー大会参加
12	3月21日(月)	9:00~17:00	金沢星稜大学	練習 閉講式	金沢星稜大学	練習 閉講式

○練習風景



5 一貫指導ジュニア育成事業 指定選手人数

	中学生男子			中学生女子		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年
平成17年度 (1期生)	6	8		7	9	
平成18年度 (2期生)	6	6		6	7	
平成19年度 (3期生)	7	7		8	8	
平成20年度 (4期生)	5	10		10	10	
平成21年度 (5期生)	5	11		8	12	
平成22年度 (6期生)	16	12	9	8	11	10
平成23年度 (7期生)	10	14	13	14	9	12

6 北信越国民体育大会 少年男子・女子の活躍

平成19年度までは、男・女隔年で直接本大会(ミニ国体免除)に出場ができる。

ただし、予選を有する場合は5県によるトーナメント戦を行い、1位のみが本大会に出場できる。

	〈少年男子〉	〈少年女子〉	【本国体出場】
平成17年度	2 位	予選免除(本国体へ)	※少年女子出場 (岡山大会)
平成18年度	予選免除(本国体へ)	3 位	※少年男子出場 (埼玉大会)
平成19年度	3 位	予選免除(本国体へ)	※少年女子出場 (秋田大会)

平成20年度から男女とも予選を開催。5県によるリーグ戦方式となり、上位2チームが本国体出場となる。

	〈少年男子〉	〈少年女子〉	【本国体出場】
平成20年度	<u>2 位</u>	5 位	少年男子出場 (大分大会)
平成21年度	<u>1 位</u>	4 位	少年男子出場 (新潟大会)
平成22年度	<u>2 位</u>	<u>2 位</u>	少年男子・女子出場 (千葉大会)
平成23年度	<u>2 位</u>	<u>2 位</u>	少年男子・女子出場 (山口大会)

7 まとめ（成果と課題）

（成果）

- ①指定選手になった自覚から、一人ひとりの練習に取り組む姿勢はたいへんよい。また、それぞれが自チームに戻ればリーダー性をさらに発揮するなど、チーム力向上への相乗効果も与えている。
- ②中学生と高校生のふれあいの場が県内各高校への進学意欲に高まっている。高校生も模範的行動を示す責任感から技術向上心への自覚につながっている。
- ③中学時代の動機付けが功を奏して、仲間意識と郷土意識という団結力が生まれている。その結果、県外高校へバレー留学する選手もなく、高校進学後もよきライバルとして、中心・主力として活躍している。
- ④国体に向け高校選抜チームを構成した際、一貫指導で培ったチームワークは確実に活かされており、近年男女ともに本国体の出場権を勝ち取っている。
- ⑤2年前から、9月以降に小学校高学年も対象選手に加えている。有望選手の発掘、中学進学後の入部・活躍に期待できる。

（課題）

- ①ここ数年、県内高校生には大型選手がいない。長身者の発掘・育成が期待される。
- ②公認指導者は年々増える一方、バレー人口の減少から対象選手の発掘が難しい。
- ③自分のチームを抱えながらも一貫指導を担当する指導者にとっては、多忙化の要因となっている。
- ④毎年中学・高校の大会スケジュール等を調整しつつ年間活動計画の立案に苦勞する。

終わりに、1期生が高校進学した以降、北信越代表として本国体への切符を取り続けていることは、一貫指導の一つの成果として中学・高校関係者とともに喜びたい。しかし中・高連携が軌道に乗るには課題もまだまだ多い。毎回練習後に行うスタッフミーティングでは、各個人の成長度確認や指導方法の反省はもちろんのこと、中学・高校現場における現状と課題を共有しつつ、今後もジュニア育成のあり方について日々努力が続いている。

石川県のジュニア選手たちに未来を託し、石川県高体連バレーボール界に栄光あれ！

○練習風景



選抜チームの国体への取り組み

ソフトテニス専門部
鹿西高等学校 高 行彦

1. はじめに

今年、石川国体 20 周年記念イベントとして、日本スポーツマスターズ 2011 が石川県で開催された。ソフトテニス会場であった能登町においても、石川国体当時の選手が、マスターズ県代表選手として出場し、優勝を成し遂げ、大会を大いに盛り上げた。

石川国体から 20 年が過ぎた現在でも、石川国体の取り組みの中で築き上げた強化策が引き継がれ、国体選抜チームの競技力向上に大いに役立っている。高校生の誰もが目標とする憧れのインターハイで思うような成績を残せなかった県選手が、選抜チームとして国体に臨み、インターハ



写真 1. 日本マスターズ石川県選手団 インターハイを上回る成績を獲得する姿は、選手と指導者が充実感を得る瞬間でもある。

石川国体当時の選手、強化スタッフが、現在指導者として国体強化に取り組んでいる現状を、今までの成績を参考にして報告する。

2. インターハイと国体の成績比較 (表 1)

平成 23 年から平成 12 年までの 12 年間の成績を比較する。

インターハイ男子：個人入賞 2 回 女子：個人 1 回 男子団体：ベスト 16 が 3 回 女子なし

国体少年男子：準優勝 4 位 6 位 7 位 少年女子：準優勝 4 位 6 位 8 位

国体の成績がインターハイの成績を上回っている。

表 1 インターハイと国体の成績比較 (H23～H12)

	H23	H22	H21	H20
IH 男子団体	ベスト16 (小松市立)	ベスト16 (小松市立)	1回戦敗退 (七尾)	1回戦敗退 (小松市立)
IH 男子個人	3回戦進出	4回戦進出	3回戦進出	5回戦進出
国 体	1回戦敗退	7位入賞	3回戦進出	4位入賞
IH 女子団体	1回戦敗退 (飯田)	2回戦進出 (金沢東)	2回戦進出 (飯田)	ベスト16 (能都北辰)
IH 女子個人	3回戦進出	6回戦進出	3位入賞	6回戦進出
国 体	出場できず	1回戦敗退	6位入賞	1回戦敗退

	H19	H18	H17	H16
IH 男子団体	2回戦進出 (能都北辰)	2回戦進出 (小松市立)	ベスト16 (小松市立)	1回戦敗退 (小松市立)
IH 男子個人	3位入賞	4回戦進出	6回戦進出	5回戦進出
国 体	2回戦進出	1回戦敗退	1回戦敗退	出場できず
IH 女子団体	2回戦進出 (金沢東)	1回戦敗退 (能都北辰)	2回戦進出 (能都北辰)	1回戦敗退 (小松市立)
IH 女子個人	3回戦進出	4回戦進出	4回戦進出	5回戦進出
国 体	出場できず	1回戦敗退	1回戦敗退	出場できず

	H15	H14	H13	H12
IH 男子団体	2回戦進出 (能都北辰)	2回戦進出 (能都北辰)	2回戦進出 (小松市立)	1回戦敗退 (金沢東)
IH 男子個人	4回戦進出	ベスト8	6回戦進出	5回戦進出
国 体	準優勝	6位入賞	1回戦敗退	1回戦敗退
IH 女子団体	1回戦敗退 (能都北辰)	1回戦敗退 (小松市立)	2回戦進出 (能都北辰)	1回戦敗退 (能都北辰)
IH 女子個人	3回戦進出	4回戦進出	5回戦進出	6回戦進出
国 体	8位入賞	2回戦進出	4位入賞	準優勝



写真2. H20 大分国体 石川選抜 対 三重



写真3. H21 新潟国体 石川選抜 対 宮城県

3. 具体的な取り組み

(1) 石川国体方式を継続

①選手及び監督・コーチの選考

強化部が、選手選考会での予選リーグと最終リーグすべての試合結果と対外試合成績を参考にし、8～10人の候補選手を選考する。多い時では、5～6校に選手が分散する。インターハイ出場選手が国体候補選手なることが多い。監督、コーチも協議して決定する。

②成年男女との合同強化練習会

石川国体当時は、全国レベルの選手が地元企業にかなりいて、胸を借りる機会がかなりあった。現在も、4種別の合宿を実施して少年男女の競技力向上に協力してもらっている。

少年と成年の協力体制がスムーズに行くのは、元成年代表選手が、高校指導者であり、県連盟とのパイプ役を果たしているからである。



写真4. H20 北信越国体開会式

③インターハイから国体への切り替え

インターハイが終了してから、本格的に国体に取り組むことになるが、7月のインターハイ強化練習段階から、選抜チームのペアリング構想は準備をしておく。また、インターハイ会場において国体で対戦が予想される県の情報収集を、インターハイ参加の強化部スタッフが行う。

④指導者の団結力

石川県で育った選手が、石川に残っても全国で活躍できる環境を作ろう。国体なら、県内に残った有力選手で戦えるという強化部の方針が、各専門委員にも浸透している。さらに、各高校顧問、代表選手には、チーム石川という意識が、県外での戦いに強く感じられる。勝ち残りの学校を懸命に応援する姿勢は、各高校顧問と本県選手団のまとまりのよさを感じる。これは、石川国体以前からみられることである。

(2) 近年の取り組み

①北信越国体、全国大会会場での事前合宿・練習試合

毎年必ず実施している。時には、年末の大雪の悪条件の中を、選抜予選会場の長野県松本市へ移動することもある。

②北信越国体後すぐに強化合宿を実施

国体出場決定で選手は安心してしまう。レベルを低下させないため、さらにはレベルアップして一気に国体へ臨むために実施している。

③体力向上と運動能力の開発

国体に選抜される選手の多くは、ジュニア時代からソフトテニス競技を専門的に行っており、他のスポーツ経験が少なく、運動能力が十分開発されていない傾向にある。ゲームテクニックや試合運びは上手だが、運動能力に優れる選手は少ない。県総合スポーツセンターを利用して、科学的トレーニング特別強化学業を有効に活用して能力開発に努めている。

4. ソフトテニス専門部組織について

ソフトテニス専門部委員は現在 19 名。加賀地区 4 名 金沢地区 4 名 七尾地区 5 名 能登地区 6 名 計 19 名。それぞれが、総務部 競技部 指導強化部 審判部に所属する。ほぼ全員が一人二役で業務を分担している。

- (1) 総務部・・・各地区に責任者が 1 名おり、各地区大会・県大会の申し込みの集約、日本連盟・高体連登録の集約

- (2) 競技部・・・大会の組み合わせ作成、大会の競技進行
- (3) 指導強化部・・・強化練習会計画、強化選手・国体候補選手の選考と競技力向上対策
- (4) 審判部・・・生徒審判が基本のため、選手全員に日本連盟2級審判員資格を取得させる。

5. 課題

- (1) 指導者の高齢化と若手指導者不足

教員採用人数が減少したため、大学で優秀な戦績を挙げ指導者としても魅力のある選手が、かなり講師として教員を目指しているが、正式採用には至らない現状。

- (2) 中学、高校選手の県外流出

60 総体以前から、県外有名強豪私立学校への流出はあった。今では、私立中学にまで入学する現状がある。全国各地にいる優秀選手発掘の場である宮崎県開催のステップ4は、強豪私立学校のスカウト合戦の場、選手の情報交換の場になっている。県立学校では太刀打ちできない現実が存在する。

- (3) 公立学校教員の人事異動がある。石川国体時代の強化校を指定するような思い切った強化策が取りにくい。

「日本一を目指して」－継続練習と新たな挑戦－

卓球専門部

遊学館高等学校 植木 大

はじめに

平成8年4月に当時の金城高校（女子高）から遊学館高校（共学）へと変わり、その年に男子卓球部が創部されました。最初は何をするにも0からの出発でした。やるからには「日本一」を目指そうと決意しました。そのためには、どのチームよりも「練習」をすることが大切だと考え、まずは「練習量で日本一になろう」と取り組んできました。

その結果、創部2年目には全国高校選抜卓球大会への出場権を獲得し、翌夏の石川県総体（全国高校総体予選）では、初めて優勝することができ、インターハイへの出場権を獲得しました。（平成10年から現在まで14年連続優勝中）また、北信越総合体育大会においては学校対抗で現在11年連続優勝中です。さらに、インターハイの学校対抗では、3位入賞を4回、国民体育大会においても7回入賞し、今年は3年連続3位になりました。

1 日本一になるには

(1) 何かで一番になろう

監督就任にともない、日本一になるためにはどのチームよりも「練習」すること、つまり、練習量で日本一になることが大切だと考えました。そこには、以前から「日本一」を目指すなら、何かで一番にならなければという想いがあったからです。

それでは、ここで普段の練習時間を紹介したいと思います。練習時間は以下の通りです。

練習量（規定練習）

平日 6:45～7:30、16:00～20:30

土日 9:00～17:00

以上のように、規定練習の時間は決まっています。一方で、これぐらいの時間であれば他の部活動でもやっているのではないかと思います。ただ、あくまでもこれは規定練習の時間です。その他にも、生徒は規定練習後に各自で自主練習を行っています。自主練習の時間は生徒に任せてあるものの、ほとんどの生徒が監督やコーチから指摘された課題をクリアするのに時間がかかるため、だいたい2～3時間は練習を行っています。したがって、練習が長引けば、日付が変わることも多々あります。

加えて、言うまでもないかもしれませんが、ただ練習時間をこなすだけでは強くなりません。そのため、練習の内容においても、きめ細かく指導しています。特に卓球競技の特性として、一人でサーブ・レシーブ・攻撃・守備など、すべてを自分でしなくてはなりません。時間がいくらあっても足りない状況なのです。

(2) 365日練習

その名の通り、365日休まず練習を行うことです。「継続は力なり」の言葉を信じて、毎年365日の練習に取り組み、今では連続5670日を超えるまでになりました。（2011年11月30日現在）卓球部を創部して以来、一日も休まず練習を継続していますが、これは保護者・学校の協力があることであります。（資料：新聞記事参照）

昴 すばる

十一日で五千三百六十五日目。金沢市の遊学館高校卓球部、植木大監督(三七)は一日も休まずラケットを振り、指導を続けている。十四年前の創部以来、ずっとだ。

卓球を始めたのは、出身地栃木県の中学時代。入学したばかりのころ、伊沢和夫教諭から「植木はどいつだ。放課後、卓球場に來い」と呼び出された。スポーツテストの成績が良かったので目をつけられたのだ。

こわごわ顔を出すと、同級生の女子と対戦させられ、一点も取れずに敗戦。「女の子に負けたま



14年以上、1日も休まず指導する植木監督＝金沢市の遊学館高校

5365日休まず指導

ま辞めるか。根性なし」と監督の山中瑞夫教諭は「お伊沢教諭に言われた。悔まえらは弱い。強い選手しくて入部し、気付けばが休んでいるときが追い地区の大会で優勝するまつくチャンスだ」。一年でにのめり込んでいた。三百六十五日、練習漬け「僕のように取りえのない生徒の人生を一言でにたびたび出場した。変えられる。学校の先生高校三年のとき、就職になりたいたい」。中学三年のを勧める親と衝突した。とき、将来の目標を「教「どうしても教員になり

び出し、監督の家に二週間ほど居候した。監督は内緒で両親を説得してくれ、進学できた。

大学を卒業した一九九六年春。共学になりたての遊学館に就職。男子卓球部が創設されて監督に。初心者ばかりの部員五人から始まった。「日

員」に決めた。高校も地元たい。そのためには大学本一を目指す。まずは練習量で」。一日も休まず練習し、二年で全国高校総体に出た。今年は三年連続の三位となった。

「ここまで来たら一日でも二万日でも続ける」。恩師二人の熱い思いを自分の教え子へも引き継げればと、今日も休まずラケットを振る。

(中村文人)

2 新たな挑戦

(1) 自宅にて小学生を下宿

今年の3月に愛知県から1名(5年生)、4月から石川県から1名(6年生)、私の自宅で下宿しています。そもそのきっかけは、私の大学の先輩が「どうしても息子を預かって、強くしてほしい」とお願いされたからです。さすがに、小学生を預かるのは「荷が重い」と考えたものの、私の家族も協力してくれるということもあり、また、先輩の強い熱意に応えたいという思いから、小学生(愛知県)を引き受けることになりました。そして、4年生の頃から練習に来ている石川県の小学生がその噂を聞きつけ、「自分も下宿したい」と志願したことにより、愛知県と石川県の小学生を預かることになりました。

(2) 小学生の様子

資料：VTR



(平成23年5月16日 MRO レオスタ放送から)

(3) そして…

今年の7月に兵庫県神戸市で行われた全日本卓球選手権大会(小学5・6年生の部)にて、6年生は優勝しました。また、5年生は、ベスト16まで進出しました。

3 おわりに

今年度のインターハイでは、学校対抗5位、国民体育大会では第3位になりました。まだまだ、日本一へは厳しいのが現状です。

本校の第2代目校長である加藤二郎先生の言葉に、「教育とは云うてきかす事でない。して見せる事でない。している事である。」また、理事長である加藤晃先生は「教育とは、先生と生徒の全人格のぶつかり合いの中から生まれてくる生徒への影響、しかも何らかのよい影響である。」という言葉があります。これは、私の監督理念ともなっています。これから先もスタイルを変えずに365日練習を継続し、生徒と喜怒哀楽を共にしながら、「日本一」への道程を歩んでいきたいと思えます。

第5回県研究大会参加者名簿

	学校名	氏名			
1	加賀聖城	波佐間英之			
2	大聖寺	長谷川徹			
3	加賀	辻教夫			
4	小松商業	笹生裕子			
5	小松工業	中谷昌和			
6	小松市立	豊田浩			
7	小松	北橋浩志	矢田英	荒川富夫	
8	小松北	中川太			
9	小松明峰	野田誠一	向田匡宏	安田誠二	山田進
10	寺井	山下修	達光洋		
11	鶴来	櫻井外郷	中村司		
12	松任	中川裕恵	山口賢一	西垣仁志	
13	翠星	北中弘規	根石修		
14	野々市明倫	宮井康男			
15	金沢錦丘	角橋茂則	中町和弘		
16	金沢泉丘	神田康	正木梨絵		
17	金沢二水	木村哲也			
18	金沢中央	門間昭彦			
19	金沢伏見	今川徹	亀井万理	紺谷和生	
20	金沢辰巳丘	舛田吉光	田村達		
21	金沢商業	田中幸一			
22	金沢工業	斉藤智之	新田雅史	大塚正則	瀧野勝利
23	金沢桜丘	向井愛			
24	金沢工業	水内浩	平沢謙輔		
25	金沢北陵	大谷内圭介	後川徳人		
26	金沢向陽	山首一恵	中川義之		
27	内灘	守屋英樹			
28	津幡	福井有澄			
29	宝達	稲田秀幸	至極英代		
30	羽咋	山岸亜矢	館直人		
31	羽咋松	白藤金一			
32	羽咋工業	中越顕治			
33	志賀	高田浩	倉脇寛支		
34	鹿西	高行彦	青葉紀子		
35	七尾東雲	赤穂真	中川秀人		
36	七尾尾	中山昌美			
37	七尾城北	三嶋美和子			
38	田鶴浜	池田隆			
39	穴水	西川祐喜			
40	門前	白木正文			
41	輪島	小杉央子	西田竹志		
42	能登	川原智恵子			
43	飯田	嶽桂輔			
44	ろう学校	片山敏弘			
45	いしかわ特支	小山二郎			
46	金大付属	野村いづみ			
47	小松大谷	人見雅樹			
48	北陸学院	芳養朋子			
49	遊学館	植木大	中田浩文		
50	尾山台	大内史子			
51	星稜	鍋谷正二	西川明大	串田孝子	
52	金沢学院東	中島義春	松田裕太郎	得能梨加	
53	鵬学	山口宏治			
54	日本航空	田辺和文			
55	石川高専	河合康典			
56	県教委育委員	坂本政男	岩城宏志	橋本祐之	

平成23年度 第46回全国高等学校体育連盟研究大会開催要項

- 1 趣 旨 財団法人全国高等学校体育連盟に加盟する各高等学校体育・スポーツ指導者の資質の向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主 催 財団法人全国高等学校体育連盟 鹿児島県教育委員会 鹿児島市教育委員会
- 3 共 催 毎日新聞社
- 4 後 援 文部科学省 鹿児島県連合校長協会 鹿児島県私立中学高等学校協会
- 5 主 管 財団法人全国高等学校体育連盟研究部 鹿児島県高等学校体育連盟
- 6 期 日 平成24年1月18日(水)・19日(木)
- 7 会 場 かごしま県民交流センター
〒892-0816 鹿児島市山下町14番50号
TEL (099) 221-6600 FAX (099) 221-6640
- 8 参加者 各都道府県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者及び高等学校の部活動に興味関心を持つ指導者・研究者・学生
- 9 大会主題 「チェスト! 夢はここから 燃えよ高校生」
～スポーツで切り拓く未来～
- 10 内 容 (1) 課題研究 (シンポジウム)
(2) 分科会
第1分科会 「競技力の向上」
第2分科会 「健康と安全」
第3分科会 「部活動の活性化」
(3) 講 演
講 師 平尾 誠 二 氏
神戸製鋼コベルコスティーラーズGM兼総監督
元ラグビー日本代表監督
文部科学省中央教育審議会委員
演 題 『人を育む, 心を育む ～スポーツが社会を変える～』

11 日 程

時間 月 日	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1月17日(火)							①	②	
1月18日(水)	受付	開 会 式	全体会 (課題研究)	シ ョ ン ア ト ラ ク	昼食	分科会			
1月19日(木)	全体会 (分科会報告・ 講評)		全体会 (講演)	表彰 閉会式					

① 発表者・助言者・司会者打合せ会議

② 財団法人全国高等学校体育連盟研究部委員会会議

■「課題研究」(シンポジウム)登壇者一覧

テーマ	高体連活動の可能性と課題を探る ～課題研究への取り組み(日常)と東日本大震災で見えたこと(非日常)を中心に～		
県名	氏名	内容	所属校
宮崎	クロキ アキヒロ 黒木 章宏	これまでの課題研究を振り返って ”日常”から見える可能性と課題	宮崎県高等学校体育連盟研究部 宮崎県立日南高校
東京	シマサキ マサキ 嶋崎 雅規		東京都高等学校体育連盟 ラグビー専門部 帝京高校
千葉	ナンブ タケシ 南部 健		千葉県高等学校体育連盟 研究部 千葉県立船橋高校
広島	ミヤモト ケンイチ 宮本 賢一		広島県高等学校体育連盟 理事長 広島県立広島皆実高校
宮城	スズキ ヒデトシ 鈴木 秀利		宮城県高等学校体育連盟 事務局長 宮城県立利府高校
宮城	スズキ ヒデトシ 鈴木 秀利	東日本大震災と宮城県高体連 ”非日常”から見える可能性と課題	宮城県高等学校体育連盟 事務局長 宮城県立利府高校
司会・進行		ナカツカ ヨシミ 中塚 義実	全国高等学校体育連盟研究部活性化委員長 筑波大学附属高校

■「分科会」発表者一覧

分科会テーマ	県名	発表者	テーマ	所属校
第1分科会 競技力の向上	滋賀	ヒグチ オサム 樋口 修	『豊かな感性を身につけた選手の育成』 ～世界から日本, 日本から滋賀, そして伊吹～	滋賀県立伊吹高校
	徳島	シバサキ エリ 柴崎 絵里	『高等学校における競技力向上に対する意識調査』	徳島県ひのみね支援学校
	大分	ワタナベ タケシ 渡邊 剛	『女子バレーボール強豪校の秘密』 ～試合前の調整方法を探る～	大分県立大分工業高校
	宮崎	タナカ シンジ 田中 真二	『競技力向上を推進していく上での現状把握とその分析』 ～中高連携に関する実態調査を通して～	宮崎県立延岡商業高校
	鹿児島	ヨシオカ マサアキ 義岡 昌明	『ボールを利用した高強度の対人トレーニングが高校生 サッカー選手の基礎体力および試合時の運動量に及ぼす効果』	鹿児島県立串良商業高校
第2分科会 健康と安全	山形	シラタ ハジメ 白田 元	『部活動における安全指導の現状と課題』 ～現代にあった安全指導の普及を考える～	山形県立山形工業高校
	福井	タノベ ミツル 田野辺 満	『体操競技の技術進歩と安全性について』 ～男子高校生の現状と課題～	福井県立鯖江高校
	愛知	イシカワ ケンジ 石川 健二	『ヨット競技と安全』 ～セーリングを安全に行うため～	愛知県立碧南高校
	岡山	ヒカサ ケイゾウ 日笠 敬造	『岡山県の高校生の部活動におけるケガについて』	岡山県立岡山御津高校
第3分科会 部活動の活性化	茨城	ウライ マサユキ 浦井 雅之	『運動部活動の教育的意義に関する研究』 ～本県教員の意識調査を通して～	茨城県立水戸第三高校
	石川	ニシカワ アキヒロ 西川 明大	『ジュニア選手の育成と地域での体験交流活動』	星陵高校
	沖縄	オオシロ エリカ 大城 エリカ	『なぎなた競技の魅力を伝えるために』 ～美ら島沖縄総体成功の背景～	沖縄県立那覇高校
	鹿児島	セトガワ タク 瀬戸川 拓 フクダ ケンゴ 福田 健吾	『運動部活動に関する意識調査』 ～自尊心を高めるような運動部活動のあり方について～	鹿児島県立鹿児島中央高校 鹿児島県立国分高校

編集後記

今年も研究紀要を発刊でき、大変うれしく思います。

昨年度より委員長を引き受け、各方面にご迷惑などをおかけしていることと思いますが、今年度も研究紀要の発刊をもって無事終了することができました。第5回を迎えた県の研究大会も、皆様のご協力のお陰で成功裏に終わり、ほっと胸をなで下ろしているところです。しかしながら、県高体連・高体連研究部としての課題もたくさん残っており、今後も一つずつ課題をクリアし、県高体連・高体連研究部が発展するとともに県全体の活性化につながればと思っております。

また、今年度の全国研究大会鹿児島大会では、「部活動の活性化」の分科会で、トランポリン専門部の星稜高等学校西川明大先生が全国発表されました。石川県代表として、大変素晴らしい発表になったことをここにご報告させていただきます。

昨年度より、この研究紀要を県高体連のホームページに載せていくことになりました。運動部活動の顧問をされている先生方にご活用いただき、県全体の指導力や競技力が向上していくことを願っております。この紀要をご覧いただいた先生方には、是非周りの先生方にもホームページに紀要があることをお伝えしていただければと思います。

最後になりましたが、関係各機関や調査研究委員の方々にこれまでのお礼と感謝を込めて、編集後記といたします。 (達 光洋 記)

平成23年度石川県高等学校体育連盟調査研究委員会名簿

	地区	氏名	学校名
部長	副会長	中嶋 敏一	寺井
委員長	副理事長	達 光洋	寺井
委員	加賀	波佐間 英之	加賀聖城
		中川 裕恵	松任
	金沢	串田 孝子	星稜
		大谷内 圭介	金沢北陵
		齊藤 智之	県立工業
		神田 康	金沢泉丘
	能登	赤穂 真	七尾東雲
		小杉 央子	輪島